

2019年9月29日(日)／説教者：國分美生

説教：「イエスの示す『正しさ』」

聖書：ヨハネによる福音書5:1～18

エルサレム神殿の北側にベトザタという池がありました。その周りには、重い病気の人が大勢いました。イエスはそこを素通りせず、臥せている一人の男性に目をとめます。そして彼に「健やかになりたいか」と声をかけました。病人は「自分には水が動いたときに、池に入れてくれる人が誰もいない。」と訴えます。この答えから彼がどれほど自分の抱えている病気が癒されることを熱望し続けてきたかが浮き彫りになります。その切実な訴えを聞いて、イエスは「起きなさい、あなたの寝床を担ぎなさい、そして歩くのだ」といわれました。すると、その人はたちまち健やかになって、イエスが言われた通り寝床を担いで歩き出しました。

しかしこの日はユダヤ人にとっては安息日という特別な日でした。神が天地創造の後に休まれた日として、人間も一切労働をせず休まなくてはならないと律法に定められており、床を担ぐ行為も、病をいやす行為も労働とみなされ禁止されていました。ユダヤ人たちは癒された人とイエスに対し「律法を破っている」と激しく非難します。ここでのユダヤ人たちというのは、ファリサイ派やその他の宗教的指導者たちに大きな影響を与えていたユダヤ人教師だっと思われれます。ユダヤ人が神の民であろうとするならば、神がその民に対して要求することを満たさねばならない、という理想はユダヤ人の間に広く浸透していました。イスラエルにとって律法を忠実に守り、神の前に潔い信仰共同体であることがアイデンティティでした。律法を守ることができない人たち…とりわけ病人や障がい者がイスラエル共同体からはじかれていた理由がそこにありました。

その安息日における癒しの行為がユダヤ人たちの反感を買うということを、イエスは知っておられたでしょう。しかしイエスは病気の人と出会われ、その思いを受け止めた。そして最優先すべきことを選びになったのです。イエスは責め立てる人々に「わたしの父は今に至るまで業をなしている。だから私も業をなす。」と答えます。安息日であろうが、いつなんどきであろうが、神は常に私たちをかえりみる救い主なのだ、と聖書は言うのです。

私たちは社会の中で自分たち人間が決めたルールの中で暮らしています。人間の作った法には限界があり、命を守るには不十分な時もあります。イエスが、人間が定義した「正しさ」の枠を壊し、真の神の国を指し示したことをいつも覚えて、私たちが歩みたいものです。(国分美生)